

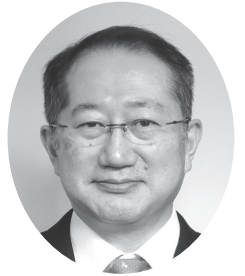
令和5年度

鹿児島県の教育

12月号



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会高等学校長部会副部長

鹿児島県立甲南高等学校
宮田 俊一

全ての生徒が放つ輝きを 見逃さない

新型コロナウイルス感染症が二類から五類に変わり、初めての体育祭、文化祭を九月に実施した。熱中症対策や感染症対策を行いなから、滞りなく学校行事ができたことを生徒、教職員そして関係者に感謝したい。

今年の本校の体育祭、文化祭の統一テーマは「玲瓏」であった。本校生が考えたテーマである。「玲瓏」について、辞書にはいろいろな意味が掲載されているが、今回は「一人一人が玉のように美しい輝きを放つ本校生」をこの言葉で表現したという。そして、体育祭のサブテーマは「紫電一閃、一瞬の輝きを見逃すな」と続く。この言葉は生徒から私たち教職員への強いメッセージであると受け取り、文化祭でも生徒の放つ輝きを見逃さないように努めた。

体育祭・文化祭ともに生徒一人一人が本場に輝いていた。これまでコロナ禍で制限されていた学校行事への鬱憤を晴らすように、全力で取り組む姿勢に心から感動した。しかし、生徒は、体育祭・文化祭だけではなく、日々の学校教育活動においても、それぞれ異なる輝きを放っていることを私自身改めて気付かされた。

このことだと思いつくのが二年前、NHKの連続テレビ小説で放映された「カムカムエヴリバディ」での一場面である。尾上菊之助が演じる時代劇役者桃山剣之介の映画の中の台詞「暗闇でしか見えぬものがある。」である。この台詞の解釈は人それぞれであるが、私は、「昼間は、太陽の光が強すぎて認識することのできない星々も、暗闇であれば、様々な色で輝く様子ははっきりと見ることができると」と解釈した。

さらに、二十年以上前に私が担任をした際の苦い思いも蘇った。勉強や部活動、生徒会活動など、充実した学校生活を送っている生徒の輝きに目を奪われて、勉強やスポーツなどを得意としない生徒が放つ輝きを見逃し、十分な指導ができなかったことに対する後悔である。

生徒は、一人一人異なる能力・個性・可能性などを持ち、それぞれの輝きを放っている。我々教員は、生徒の放つ輝きを見逃さず、その輝きが増すための手立てを講じなければならぬ。私は、十月の全校朝礼において、本校での諸活動が生徒の輝きを増す場になることを全校生徒に誓った。

令和5(2023)年 12月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



価値と経営理念

有限会社原田米店 代表取締役 原田 匠

有限会社原田米店は、日本の食生活の根幹食材（主食）であるお米を取り扱う者として、日本の良質な米づくりを応援し、仕入先である生産者様等並びに販売先様である消費者に対して、公正かつ誠実な商取引を行い、さらに、自らの知識、経験、技能をもって、高品質の商品づくりとサービスを提供することに最大の努力をして商いを続けております。

また、南九州では唯一「農産物検査員」「五ツ星お米マイスター」「お米ソムリエ食味鑑定士」「炊飯コンサルタント」の四つの資格を取得しており、お米の専門家がいる轄する米穀店としてお米に関する専門的な知識を生かし、お米に関するワークショップや保育園や幼稚園、小・中学校での食育授業・一般の企業様や外食産業の従業員様への炊飯講習にも積極的に取り組んでおります。

「当社の経営理念」

食のもつチカラを存分に引き出し「食と人」の新たな喜びを広げ、ふるさとの発展と心豊かな社会の実現に貢献します。私たちの経営理念は「Mission（ミッション）、Vision（ビジョン）、Value（バリュー）、Way（ウェイ）」の四つの要素で構成されております。

- (一) Mission 高品質の商品提供
 - (二) Vision 知識・技術の向上
 - (三) Value 社会及びお客様への行動
 - (四) Way 日本のお米文化の素晴らしさの普及
- このような意思共有を全体で行いながら日々の事業に取り組んでいますが、現在の米を取り巻く業界が置かれた現状は決してよいことばかりでなく、どちらかというところマイナスイメージを感じております。

「お米の消費動向と米の役割の変化」

例えば、国民一人が一年間に食べているお米は、一九六二年の一一八キロをピークに年々減少していて、二〇二二年では五十キロと約半分の消費量となっています。ここまでお米の消費が減少している理由には、食生活の多様化、少子高齢化、世帯構造の変化など様々な要因が挙げられ、今後も更に加速していくと考えられています。

「カロリーではトップ」

しかし、お米の消費量は減少傾向の中、依然として日本人の供給カロリーのトップを占めており、日本における食生活の主役です。お米を主食として魚介類、大豆、野菜、畜産物などが組み合わされた日本型食生活は、栄養的にタンパク質、脂質、炭水化物が適切なバランスを保ち、理想的な食生活とされており、わが国における健康的で豊かな食生活を維持する上でもお米は重要な役割を担っています。そして、お米を中心とした日本の伝統的な食文化である和食は平成二十五年に「ユネスコ無形文化遺産」に登録され世界的にも注目されております。

このようなことから今、お米に求められているのは価値の再認識でないかと考え、お米を中心とした日本の伝統的な食文化を改めて見直す機会を提供していくことが、私たちが未来へ残していく責任であり、お米の未来であると考え、昨年「ライススタイルショップハラダ」をオープンさせました。こちらの店舗のコンセプトは、「日本の伝統的な暮らしと食文化を垣間見ることができ、『美味し体験』です。日本伝統の暮らしと食文化を垣間見ることが出来る『体験』『食』『美味しさ』を通じて、お米の魅力や食への思い入れ・こだわりを提供する空間作りを行うこととお米に関する専門性と豊富な品揃えを生かして、お客様の健康状態やニーズに合わせた

略歴

今年で八十四年目の老舗「有限会社原田米店」三代目店主
 平成十七年 農産物検査員を取得
 平成二十一年 五ツ星お米マイスターを取得
 平成二十六年 お米ソムリエ食味鑑定士を取得
 平成二十六年 炊飯コンサルタントを取得
 令和二年 お米HACCPを取得
 令和四年八月 お米と暮らしの専門店「ライススタイルショップハラダ」オープン

お米を最高の状態で提供することで、美味しいお米を食べたいという人を増やし、お米の価値の再認識をしていただく店舗を目指しております。

「価値とは」

そもそも価値とは何なのか、辞書で調べると「そのコト・モノが、どれくらい大切か、またどれくらい役に立つかという程度。またその大切さ。値打ち。」と書かれています。そうすると、価値とは、「人の役に立ち人の悩みや欲求を満たすもの」であると私は思います。

当社では「お店」「スタッフ」「商品」この三つを「一つの商品」であると考えており、常に皆様のお役に立てるよう試行錯誤を繰り返しながら価値を提供することでお米の魅力や新たな食付きを再認識してもらえようではないかと考えています。

ここまで、価値と経営理念について書いてきましたが、それは、先日読んだ本で「若者たちは今、自分には価値がないと思っている」という一文を読んだからです。これからの子供たちに望むことは、夢や希望を持って、周りの仲間と意思を共有しながら、目標に向かって成長してくれることです。

先生方には、日頃の学校生活の中で、子供たちにたくさん「気付き」を与えていただき、ワクワクしながら子供たちが成長できるように「自分の力で社会や会社を変えていける」「自分は価値のある人間だ」と一人でも多くの子供たちが言えるようにしていただきたいのです。そして、自分には価値があると胸を張って言える人財で溢れるために、これから新しい価値を生み出して行く子供たちが、夢や目標を持って社会で活躍できるように、ご指導いただければと思います。



特別支援教育の視点を生かして

佐志小(北) 渡邊 義 幸

一 はじめに

「一人一人が主人公」

本校のキャッチフレーズに用いられている言葉である。教育方針の「子供一人一人を大切にする」や「一人一人の可能性を伸ばす」を象徴している。この実現のためには、特別支援教育の視点が大切だと考える。

二 特別支援教育について

特別支援教育については、平成十九年に学校教育法が改正され、十数年が経過している。その理念は、以下のように示されている。

「特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点を立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。」

「さらに、特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持つてい

る。」

これは、特別支援学級に在籍する子供たちはもちろんのこと、支援を必要とする全ての子供たちに目を向け、一人一人のニーズを明確にして、共に学び、共に育つことができるような支援や配慮が必要であり、多様な学びの保障が求められていると言える。

三 UDLと「個別最適な学び」

令和三年の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の中で、以下のように記されている。

「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。」

特別支援教育が重視している一人一人の教育的ニーズに応じた教育の方向性は、令和の日本型学校教育において、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と同一であると捉えられる。

以前の勤務校で、特別支援教育における

「学びのユニバーサルデザイン」(以下UDL)について研修する機会があった。UDLとは、障害の有無に関わらず、全ての子供たちの学びを助け、自分の得意な学習方法で、自分自身が選択しながら、学び続ける学習者を目指すという考え方である。

このUDLは、「個別最適な学び」に通じるものだと考える。UDLでは、子供たちが主体的に学ぶために、「どう教えるか」ではなく、「どのように学ぶか」という視点から、授業を見直すことになる。実践の手立てとして「オプション」や「段階的支援」などが挙げられる。「オプション」とは、学ぶための教材や環境の選択肢のことで、子供たちが自分に合った必要な学習を選択する。「段階的支援」とは、提供した支援を必要に応じて減らしたり増やしたりすることである。このような手立てを用いて、子供たちが主体的に学べるようにする。

UDLを活用した授業改善を推進することが、全ての子供たちの学習を充実させる「個別最適な学び」につながるものと確信している。

四 おわりに

現在、学びの改革期にあり、「子供たち一人一人の主体的な学び」を柱とした授業改善に、より一層取り組んでいくことが重要である。

本校でも、「一人一人が主人公」となる授業を、学びの場をデザインしていけるように、全教職員で意識改革・授業改善に努めているところである。



校務分掌の機能化と働き方改革のために

東市来中(日) 岡田 芳文

少子高齢化、情報化、価値観の多様化、ワーク・ライフ・バランスの推進等、社会は大きく変わろうとしている。このような時代にあつて、学校教育は、いじめ・不登校への対応や特別支援教育に関わる対応等継続した教育課題に加え、個別最適な学び、GIGAスクール、校則の見直し、部活動の地域移行、業務改善・働き方改革等、改革・推進すべき課題を数多く抱えている。新たな時代への過渡期であり、校長は難しい舵取りを迫られている。このような時代だからこそ、基盤は共有すべきだと考える。ノウハウ的な提言であることを御容赦ください。

一 決裁システムの確立

新たな学校に校長として赴任し、まず着手するのは、決裁システムの確立である。「これをしていないことには学校は変えられない、思ふような学校経営はできない」と考え、やや強引にでも変更してきた。それは、次のようなシステムである。

- ① 起案文書等は、企画委員会三日前までに教務主任に提出させる。
- ② 教務主任→教頭→校長→企画委員会→職員会議→校長決裁という流れをとる。

③ 必要に応じてヒアリングを行う。特に改革したい内容については、起案前に校長の意図を伝え、改革案を作成させる。

④ 校長チェックまで終わった段階で、修正箇所を修正して、企画委員会に提案させる。

⑤ 企画委員会・職員会議でさらに審議し、最終的に決裁する。

⑥ その他、決裁等が必要な職員朝会等での提案も必ず事前に相談させる。校長が職員朝会等で新たな提案を初めて聞くことが決していないよう徹底する。

このシステムを確立すると、校長の了承を得ない提案がなくなり、安定・安心した学校経営、職員のアイデアを生かせる学校経営、校長の意図する改革を推進できる学校経営が実現できる。この基盤がどの学校でも確立できていれば、校長は赴任当初から、教育課題解決に着手できるのではないかと考える。

二 自習ゼロの徹底と計画年休取得促進

出張や計画年休等に対応して二週間先の授業振替をさせ、自習ゼロを目指す。職員が計画年休を取得したい場合には、二週間前までに所定の様式に入力すれば係がそれを考慮し

た時間割を作成する。これにより、職員が気兼ねなく、計画年休を取得できる体制を整えている。お互い様という気持ちを持たせ、計画年休取得を促進している。自習ゼロにより、学力向上、生徒指導面での安定、働き方改革を推進する。さらに、長期休業中の全員出勤日(出校日、職員会議、職員研修等)については教育課程で示した日とし、やむを得ない場合を除き変更しないことを年度当初に明言する。これにより長期休業中の旅行等を計画しやすい環境づくりをしている。

三 校務分掌配置は全て校長が決める

校務分掌は、未決定部分を残さず全て校長が配置する。なぜなら、適材適所、教員の資質向上、公平分担、機能化等を考え組むべきものが、主任やキヤップ以外を学年裁量とすることにより職員の間関係等で崩れてしまうからである。係のキヤップ以外も一つ一つに全て意図をもって組織する。業務推進に当たっては、起案は必ずキヤップにさせ、一人一人の仕事が膨れ上がらないよう配慮する。校長として、与えられた人材で組めるベストの布陣を組むことにより、その年度の学校経営への責任と覚悟を固めるとともに、校務分掌の機能化、働き方改革を推進する。

四 おわりに

これからも学校経営推進の基盤のもと、様々な教育改革と「教育の質を落とさず、効率を上げる」という校長職に課せられた難題に挑み続けたい。



校訓「伸びよ

明るく たくましく」
の具現化を目指した学校経営

宮脇小(南) 上床 研 三

一 はじめに

南九州市は、平成十九年十二月一日に穎娃町、知覧町、川辺町の三町が合併し誕生した市である。薩摩半島の最南部に位置し、東は指宿市(旧開聞町)、西は南さつま市、北は鹿児島市(旧喜入町)に隣接しており、総面積は三五七・八五km²で、海の幸・山の幸に恵まれた風光明媚な市である。宮脇小校区は、旧穎娃町の南東にあり、穎娃支所、銀行、その他の官公署や運動公園、穎娃中央温泉、穎娃中・穎娃高等学校もあり、町の中心地である。児童数は減少傾向にあるが、学校・家庭・地域の連携が図られ活気のある校区である。

二 学校教育目標

『自ら学ぶ 共に学ぶ。』「確かな学力・生きる力を身に付けた子供を育てる」が本校の学校教育目標である。急速な情報化や技術革新、グローバル化など将来の変化を予測することが困難な時代において、心身の健康や、主体的に行動できる実践力等の生きていく力の育成に努め、保護者の願いや地域の期待に応える特色ある宮脇小学校の教育を創造し推進する。

三 取組の実際

(一) 学力の向上

各種学力検査の結果から、個々の実態を把握・分析し、個に応じたきめ細かな指導に努め、確実な学力を身に付けさせることや毎時間の定着の場、補充指導の時間等を利用して、学力の向上を図っている。また、学びを自分のものにするために、自由進度学習を一部取り入れている。さらに、家庭学習の手引きやしおりを活用し、計画的な取組や学習時間の確保と内容の充実を図る等の取組を行っている。

(二) 人権教育の推進

人権教育に関する研修はもとより、あらゆる機会を通して職員相互に語り合い、学校全体として、子供一人一人を大切にしていくなかを醸成している。本年度は特に、「子どもの人権プロジェクト」と「人権の花運動」の取組も合わせて教育活動全体を通して、自他のよさを知って尊重し合い、共によりよく楽しく生活しようとする態度の育成を目指している。

(三) キャリア教育の充実

児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立

(四) 基本的生活習慣の確立

物、心、時間をそろえる等、『そろえる』意識の高揚と実践化を図っている。落ち着いた安全な学校生活を送らせるために、学校生活のきまりの指導を徹底して、よりよい生活の仕方について児童の意識化を図るとともに、他者を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力である「自己指導力」の獲得を目標に教育活動を行っている。また、健康相談や教育相談を実施し、児童に基本的な生活習慣の大切さを理解させるとともに、早寝・早起き・朝ごはん、メディアコントロール等の取組において、家庭との連携を深めている。

四 終わりに

縦割り班のメンバーでレクリエーションを協力して運営し、児童全員で参加する「みやわきタイム」という児童会の行事を行っている。この行事は、学校生活をよりよくするための自主的・実践的な活動であり、さらに、この活動を通して、認め合い、励まし合い、支え合う相互扶助的な人間関係を醸成していくこともねらわれている。今後も、このような行事を継続・発展させていくことで児童一人一人が安心して過ごせる、魅力ある学校づくりに努めていきたい。



子どもが輝き、 教員・保護者・地域が 輝く教育を目指して

吉野東小(市) 下松 勝 浩

「現在の小学生の六十五%が、現時点で存在しない職業に就く」この予測が正しいかどうかは分かりませんが、AI技術の急激な進歩や情報化が進む今の状況から、少なくとも子どもたちが大人になるときの社会が、今と大きく変わっていることは間違いありません。

私たち教員はもちろん、保護者や地域もこの未来予想を真摯に受け止め、「これからの教育は、どうあるべきか」を一緒に考え、改善に向けた取組を実行に移していかなければならないと考えます。

今、基礎学力を付けるだけでなく、応用力や社会に出てから必要とされる力など、たくさん要素すべてが学校に求められています。授業の準備や保護者との教育相談、不登校児童や生徒指導事案への対応など、教員の業務は多岐にわたたり、今求められていることすべてを学校の教員だけで実現することは不可能な状況です。

そこで、学校のできることで、できないこと、よい部分、悪い部分もすべてつまびらかにして、地域や保護者、また広く世の中に力を貸しても

らおうと考えました。今後、ますます学校に求められることが増えていくことが予想される中で、「学校が外部リソース(人材)を活用しながら質の高い教育環境づくりをしていく」ことが重要と考え、コロナが明けた令和四年度から「吉野東小学校支援ボランティア」を再スタートさせました。一方、PTAでも各種委員会をなくし、既存の組織をスリム化して、活動ごとに参加者を募る「サポーター制度」に変わりました。

学校支援ボランティアでは、まずは気軽に学校に来て、子どもと触れ合ってもらうところから始めました。学習に集中できない子どもの見守りや励まし、安全確保のための学習支援ボランティアをお願ひしました。また、朝や清掃時間子どもたちと一緒に、校庭の掃き掃除や除草などを行っていたくクリーンボランティアをお願ひしました。

子ども、保護者、地域の方、担任、みんなで活動すれば、そこにたわいのない会話が生まれ、それが互いの理解や親近感につながっていきます。担任が少し気になる児童も外部の大人と触

れ合う様子から普段は見せない子どもの一面が垣間見られて、担任として理解が深まることもありました。活動が終わる頃には、和気あいあいとした雰囲気ができ上がっています。最初、学校に外部人材が入ることに抵抗のあった教員も、様々な活動に積極的に外部人材を活用するようになりました。家庭科の調理実習やミシン操作の支援、校外でのグループ活動の付き添いや野菜作りなど様々な活動にボランティアの輪が広がっています。

サポーター制によるPTA活動では、当初果たして人が集まるのか不安でしたが、運動会の受付や観客の誘導、持久走大会の交通整理、入学式の保護者案内など様々な行事にたくさん保護者が協力してくださいました。時に参加者数と活動内容のバランスが合わず、内容の変更や中止することもあります。最初に活動ありきではなく、活動の意義や時期などを保護者と学校が再考し、柔軟に対応することは、とても大事だと考えています。

令和四年度は、延べ千五百名を超える保護者、地域の方が学校の教育活動に参加してくださいました。

私たち教員も、子ども・保護者・地域の方と同じ時代・同じ場所で生きる仲間として、一緒に活動していかなければならないと職員に話してきました。

子どもが輝く教育は、同時に教員や保護者、地域が輝く教育でなければならないと思います。



『三育』の実践で知・徳・体の成長を目指して

高隈中(隅) 中原 誠

一 はじめに

本校区は昭和三十年一月、鹿屋市と合併した旧高隈村の全域であり、高隈山系の山麓、それと連なる盆地と平坦な笠之原台地の一部を含み、高隈小・大隈小からの生徒が通う。校区民は教育に深い理解と愛情を持ち、協力的である。生徒は昭和四十年の三五〇人をピークに減少の一途をたどり、令和に入ってから四十人前後をキープしている状態で、現在は特認校制度を利用して

二 経営の方針

校長が生徒に対し、授業をする機会はなかなかない。全校朝会や学校行事等全体の場での講話こそが絶好のチャンスと捉え、日頃の思いを伝えている。

(一) 脱KIDS

小規模校故の固定化された人間関係のためか、おとなしいように感じた。そこで幼い子どもを意味するKIDSという言葉を使い、成長し、自立してほしいという願いを伝えていった。生徒の資質・能力・可能性を見出し、伸ばそうとする先生方の言葉掛けに対して、K・きつい、I・嫌、D・だるい、S・したくないという考えは捨て、「やってみます、挑戦してみます」という前向きな言動を心掛けるよう伝え、「児童」より更に、思考判断の伴う「生徒」である

(二) 三育の自覚させた。

ア 「歩育」

本校は部活動がないため、放課後スポーツクラブを開催している。クラブチーム等に所属している生徒もいるが、体力や運動能力も二極化が心配である。そのため、運動不足の解消に向け、自転車通学生は自転車で、徒歩通学生は徒歩で、特認の生徒は途中で下車し、自分の足で正門を潜る「自力登校」を意識させた。そして、「歩育」として、毎週火・金の朝は一〇分間、朝陽を浴びて運動すること、心身を整え、体を動かす機会を増やすという目標でTFwalkという名称で全生徒・全職員で校庭をウォーキングしている。

イ 「食育」

午前中、特に週休日明けに体調不良等による保健室利用が多いのも気になっていた。「給食の残食を減らす。朝食をしっかりと摂る」という学校保健委員会の目標の実践に向け、心身の維持に食の大切さを指導した。また、給食で和食の献立の日に残食が多いことから、学校給食センターの栄養士による「食に関する学習」も実施し、食の大切さを指導した。田植え・稲刈り・自分で握ったおにぎりを持参する「おにぎりの日」をセ

ットとして、食への感謝と関心を高めた。結果、残食の量は徐々に減り、今では給食日誌に完食が目立つようになってきている。

ウ 「眠育」 「食育」と同様、体調不良を訴える生徒は深夜のネットやスマホ使用で十分な睡眠が確保されていないのではないかと感じた。そこで養教が積極的に関わり、良質な睡眠を取ることを目的に、「睡眠の記録」で自分の睡眠パターンを自覚させ、就寝起床時刻の改善を図らせた。また日本睡眠教育機構指導士や子どものネットリスク教育研究会の方を招き、睡眠の大切さやメディアと健康について学んだ。結果、十時以降はメディアを使わなくなった、ベッドに入ったらすぐ寝られるようになった、生活習慣を見直し体調がよくなった等変化が見られた。

三 終わりに

今年四月に求めている生徒像をStudentの頭文字で示し、紹介した。S・すすんで行動、t・友達を大切に、u・運動をする「歩育」、d・誰にでも優しく、e・笑顔で学校生活、n・寝る「眠育」、t・食べる「食育」である。昼休み校庭でサッカーや野球をする生徒が多くなり、学校に活気を感じる。また、先日あった高隈中学校区合同運動会では躍動感溢れる応援・演舞を披露してくれた。「当たり前」の事を当たり前にする「こと」を意識させ、歩育・食育・眠育を更に実践し、知・徳・体の成長に繋がるよう努めていきたい。



TFwalk



仏様の指

手打小(北) 森 木 淳 一

二十年ほど前の話である。一冊の本との出会いから、今でも折に触れて思い出す言葉がある。それは、大村はま著「教えるということ」に記載されている「仏様の指」だ。

これは、著者が先輩教師から聞いたというお話である。内容を次に引用する。

仏様がある時、道ばたに立っていらつしゃると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこは大変なぬかるみであった。車は、そのぬかるみにはまってしまった。男は懸命に引くけれども、車は動くともしない。男は汗びっしょりになって苦

しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は抜けない。その時、仏様は、しばらく男の様子を見ていらつしゃったが、ちよつと指でその車にお触れになった。その瞬間、車はすつとぬかるみから抜けて、からからと男は引いていってしまった。

男は、仏様のおかげで引くことができたのを永遠に知らない。自分の努力で引くことができたと思っっている。まさにこの「仏様の指」こそが本物の教師であるというお話である。

当時、この話に衝撃を受けたのを覚えている。教師がしたことを子供に気付いてもらい、感謝されることは、教師の自己肯定感を高める一つの方法かもしれない。それより大切なことは、目の前の子供たちが『自分の力で』やり遂げたという達成感を味わうこと。そのために教師が準備したことや、教師の努力は、子供たちは知らなくてもいい。子供たちが自己決定し、自己実現するための、まさに「仏様の指」のような存在でありたいと思うようになった。その思いは今も変わらない。

月日は経ち、最近では、私自身が「仏様の指」に触れられながら生かされていると日々感じるようになった。見えない方々の「仏様の指」に心より感謝している。

「学校は子供のためにある」

三島硫黄島学園(郡) 石 岡 秀 久

初めて管理職になったときに、当時の校長先生から「教頭先生、学校は何のためにあると思う。」と着任早々問われた。校長先生の意図を酌むこともできず、未熟な私は・・・赤本に書いてあっただろうか、学力や可能性を伸ばす所で合っているのか、それとも管理職なので職場環境のことを答えればいいのか、と考えていたところ、校長先生は「イメージで「私は『学校は子供のためにある。』と思っているがどう思うか。」と再度問われた。シンブルイズベスト、それに尽きると答えたように思う。

学校現場でも行政でも「一つ上の立場で物事を考えよ。」と言われるが、当時の私は「学校とは何ぞや。」と考えたこともなかった。それどころか、市町村教育委員会と教育事務所の区別や役割にも関心がなかった。教科指導と部活動、生徒指導にと、日々を過ごしていたように思う。管理職になったことで、自分の無知さに目を向け、様々なことを体得したいと考えるきっかけになったひとことである。

月日は流れ、当時の校長先生も御退職なされ、私自身が校長として学校経営をする立場になった。数々の判断をしなければならず、浅学な私は責任の重さを日々痛感しているのだが、判断に迷ったときは「そのことは、果たして子供のためになるのか。」を基準にしている。

社会も教育現場もめまぐるしく変化している現在、以前の常識やスキルが通用しなくなっていることを肌身にしみて感じている。変わるもの、変わらないもの、それぞれあると思うが、私の学校経営方針として「学校は子供のためにある。私たちの職場でもある。」ということを経員に伝えている。〇〇〇イズム継承ということとで当時の校長先生にも了解を得ており、堂々とパクらせていただいている。「話は大きく、生活は質素に。」というひとことと迷ったが、私の心に残るひとことである。

「ありがとうございます」

～気付く広い視野をもつ～

諸鈍小中(大) 赤池 夏樹

「校長先生、ありがとうございます。」

学校帰りの子どもが近付いて来て言った。私

は、教室前の防球ネットを補修していた。環境整備は私の仕事。仕事だから当たり前だと思つてやっていたのだが、子どもがそう声を掛けてくれた。とても温かな心になった。

私たち大人は、子どもの頃から、何か特別なことや大きなことをしてもらったら「ありがとう」と言いなさいと、親に躰けられてきた。だから、自分にとって何か特別なことをしてもらったら、自然に感謝の言葉が出てくる。だが、防球ネットの補修は、子どもにとって特別なことだったのだろうか。

もし自分が子どもだったら、「さようなら」だけ言って帰っていたことだろう。私自身、これまで、子どもが係や掃除の仕事をちゃんとしている、先生方が担当の仕事をこなしている、それが当たり前と思つてしまっていたように思う。責任をもって仕事をするように注意や助言はしても、誉めたり感謝したりすることはほとんどなかった。いつの間にか、何か特別なことや大きなことだけに感謝するようになってしまっていた。

しかしながら、この子どもは、ちょっとしたことに気付くことができている。そして、「ありがとう」と言葉に出して言う習慣ができていた。

自分の心の視野を広げ、気付くことの大切さを、私はその子どもに気付かされた。学校がきれいに保たれ、滞りなく学校経営ができてい

のは、子どもたちや先生方の気配りや配慮、責任感や努力によって支えられているからである。目の前の当たり前のことは、本当は当たり前ではないかもしれない。もつと「気付く」広い視野をもてるようにしたい。

『感謝するに値するものがないのではない。感謝するに値するものを、気が付かないでいるのだ。(出典・中村天風)』

みず やま
水や山うかげ 人や世間うかげ

鹿屋特支 堀脇 広樹

「水や山うかげ 人や世間うかげ」私が田中一村記念美術館の学芸専門員時代に知った奄美のゆしぐとう(諺、教訓)である。このゆしぐとうを、奄美群島日本復帰六十周年記念の企画展『島のゆしぐとう書道作品展』で展示した。表現は所により異なる。水は山のおかげ、人は世間のおかげ。読むと理解できるが、鳥口を聞くだけだと容易でない。奄美の人々は、美しくも厳しい自然の中で支え合いながら生活を営み、伝統と文化、生きる知恵をつないできた。

これまで経験したことがない感染症や、人類の英知を備えた人工知能の出現。そして、自然

災害や戦争。世の中は激しく変化し、油断すると振り落とされそうである。ネット社会の便利さと、人間関係の希薄さが同居する社会。私たちの生活様式や価値観は大きく変わってきている。それでも変わらない大切なことがある。奄美のゆしぐとうは私たちにそのことを気付かせてくれる。

「十の指や 同じ長さや無ん」これも作品展で出会った言葉だ。十本の指の長さが違うように、人もそれぞれ違う個性がある。私が勤める特別支援学校には、実に個性豊かな児童生徒が学ぶ。その一人一人の社会参加と自立に必要な資質と能力の育成を目指して、職員が協働性を発揮し、保護者、地域と連携して教育の充実に取り組んでいる。国籍、性別、障害の有無など関係なく、多様性を認め合い、全ての人が幸せに暮らす共生社会こそが、私たちが目指す社会の姿である。

今年、奄美群島は日本復帰七十周年となる。十年前の十二月二十五日、近くの小学校の校庭に集まり、竹灯籠に火を灯し、地域の人と平和を祈ったことを思い出す。

昨年、ユネスコは奄美の方言を消滅の危機にある方言の一つに認定した。独特で美しい音と言い回しの島口。そして、奄美の先人が教え伝えてきたゆしぐとうが後世に受け継がれてほしいと願う。

ある日の校長講話



「挨拶」は魔法の言葉

北山小(始伊) 松崎 真

おはようございます。

朝、おうちの人やバスの運転手さん、先生方、友達に元気よく挨拶ができましたか。今日は先生が、「挨拶」ってすごいなあと感じたことを話します。

先生が小学校四年生の頃のお話です。いつも一緒に遊ぶ仲のよいお友達がいました。いつも一緒に、親友でした。ところが、ある日の体育の時間、ドッジボールをしたときに、ルールのことではけんかしました。その友達とけんかしたのは初めてでした。とても嫌な気持ちになり、その日は、お互い口もききません。家に帰った

あとも、ずっと嫌な気持ちのままです。

・ 自分は悪くないから、絶対、自分から謝らないぞ。

・ でも、すごくいい友達なのに、一緒に遊べなくなったらどうしよう。

頭の中でこのことが繰り返されて、もやもやした気分が続きました。

次の日の朝、教室に入ると、まだ、その友達に来ていません。しばらく着替えなどの準備をしていると、その友達が入ってきました。どうしていいか分からず、知らんぷりしていると、その友達の着替えが終わって、こちらに近付いてきます。そして、一言、「おはよう！」っていつものように言ったんです。先生もうれしくなって「おはよう！」と返しました。

その後は、とてもいい気持ちになって、いつものようにその友達とずっと一緒に遊んだ。二人とも「ごめん。」って謝ってないのに、なぜか、お互いを許していました。先生は、それから、「挨拶って魔法の言葉だな。」と感づいています。

みなさんが、毎朝、校門前で元気よく素晴らしい挨拶をしてくれると、「よし、今日も魔法のよう。」という気持ちになります。これも魔法のようなんです。ただ、毎日、しっかり挨拶の練習を続けないと、一回では魔法になりません。皆さんが毎日気持ちのよい挨拶を続けて、それが本物になることを期待しています。これで、今日の話を終わります。

人権を守るために気を付けること

〔校内人権月間に寄せて〕

田檢小(大)平山 晋

この二人の人名の名称が分かりますか。女の子は、「人KENあゆみちゃん」、男の子は、「人KENまもる君」です。玄関のイスの上に座っていて毎朝皆さんを出迎えてくれていますよね。

さて、この二人の名前にある「人権」とは、一人一人が、人間として明るく楽しい生活を送る権利のことで、誰もが生まれたときからずっともっている大切な権利です。そして、お互いに傷付けたり傷付けられたりしないように、大切に守っていかねばならないものです。

私たちは、いろいろな人と関わり合いながら生活していますが、相手や自分の人権を守るためにどのようなことに気を付けなければならぬのでしょうか。一緒に考えてみましょう。

(黒板に)「僕の夢、君は聞いてくれた。帰り道、君は言ってくれた。」という文を貼り) これは、毎朝皆さんが聴いている「みんなの夢」(本校

独自の歌)の出だしの部分です。この続きはどうなっていますか。(「すごい夢だね。」「ぼくはうれしかった。」「を言わせて貼る。」「では、なぜうれしかったのでしょうか。そうですね。」「すごい夢だ。」「と認めてもらったからです。」「では、このほかに、「僕」がうれしくなる言葉はないでしょうか。(発言を板書する。))このように、相手がうれしくなる言葉は、いろいろありますね。

(「ぼくは悲しかった。」「を黒板に貼る。))では、僕は、何と言われたら悲しくなるのでしょうか。

(発言を板書する。))このように、相手を悲しくさせる言葉もいろいろありますね。言葉によって、人は喜んだり悲しんだりしますね。

このように、相手を悲しくさせたということは、相手の人権を傷付けたということです。

人は、一人一人違ってはいますが、うれしいとか、悲しいとか思う気持ちは同じです。ですから、今の自分の言葉や態度が、相手を嫌な気持ちにさせてはいないかということを、いつも考えて行動するようにして、お互いの人権を傷付けることなく、素晴らしい友達関係でいてください。

「和」の具現化

垂水高 鎌田 政司

本校の校訓は、「和・学・行」です。この校訓を実際に身に付けることができるように、日々の学習に取り組んでいます。

さて、「和」「学」「行」と、漢字一字で三つ並んでいます。今回は、それぞれ漢字の成り立ちを踏まえて考えていくことにします。

今日は、「和」についてお話しします。

「和」という漢字は、左の「禾」という部分と、右の「口」という部分の二つでできているということは一目で分かります。漢字の面白さの一つは、何かと何かを組み合わされて、より豊かな世界が生じるということだと思います。この字はどのように成り立っているのかを見ていくこととしましょう。

「口」は分かかりますね。人間の口です。ここには「言葉」といった意味合いで考えましょう。「禾」は何でしょうか。『新漢語林 第二版』二六〇頁(平成二十二年十二月、鎌田正・米山寅太郎著、大修館書店)によると、音符の禾(カ)

は、「會(会)に通じ、あうの意味」と解釈しています。

今日の話の本题はここからです。

人と人が会い、互いに言葉を交わして、和みながら調和します。例えば、授業で、実習で、総合的な探究の時間で、部活動で、生徒会活動で、ボランティア活動で、様々な場面で言葉を掛け合いますね。「これ、どうしようか。」「こうしようと考えているんだけど。」「それ、いいね。」「ここ、こんなふうにもできるよ。」「そうだね。それは気が付かなかった。ありがとう。」「などです。そういうときに、人と人が「和」の状態になると思います。人は一人では考え付かないことでも、集まって言葉を重ね合わせることでいろいろなアイデアが生まれ、できなかったこともできるようになります。「和」には、そのような新しいものを創り出していく力もあるということ、この垂水高等学校で経験し、身に付けていきましょう。

今回は、「学」についてお話しします。

話のひろば



ベーカーベーカー パラドクス

吉野小(市)
常 深 章

身の回りのあらゆる物に名前はついていますが、普段は知らずに生活していても大きな支障は感じない。例えば「スリール」。

これは消しゴムに巻かれているカバーのことをいうらしい。「筒状のもの」「鞘」という

意味があるようで、最近では、カードゲームのレアなカードを保護するフィルム(カードスリーブ)として販売もしているとのこと。また、食パンの袋についている留め具を「クロージャー」、新品の靴下に付いている金具は「ソクパス」。

高級レストラン?でカレーを入れているあの容器は「グレービーポット」。それから、冷たい物を一気に食べて頭がキーンと痛くなる

状態を「アイスクリーム頭痛」。面白いのは、スーパーで売っている肉や魚のトレイに敷いてある白いシートを「ドラキュラマット」というらしいことだ。誰かに言いたくなるようなネーミングだ。不思議なことに、名前を知ると、その物自体が愛おしく感じるようになる。そう、名前は大切だ。

本校には千人を超える子供たちが通っている。職員も七十人近くいる。朝、子供たちと挨拶を交わしていると次第に顔は覚えてくるが、一人一人の名前まで覚えきれではない。名前には親の願いや思いが詰まっていて「○○さん、おはよう」と言われたら、その子はきつと喜ぶだろう。分かっている。だから毎年子供一人一人の名前を必死に覚えようと努めている。

最近、ちょっとした会話で「アレ」「アレよ」「何て言うんだっけ、○○のときに使うやつ」とか、「アノ人よ、ほら、アノ○○をしている、○○のコマーシャルに出ている・・・。」など、名前以外のことは思い出すのに、肝心な名前が出てこないことがよくある。せっかくの会話も途切れ、風船のようにしぼんでしまう。とっっても残念だ。

最近知ったのだが、このように名前以外の周
辺情報を思い出し、名前自体が出てこない状態
にも名前があるらしい。それが「ベイカー・ベ
イカー・パラドクス」だ。面白いなと思って記
憶しようとしているが、この名前もいつまで覚
えていることやら・・・。

自分が成長できた

種子島での勤務経験

大根占小(隅)

末松 雅之

今年度で教師生活
三十五年目を迎え、
勤務した学校は十校
を数える。それぞれ
の学校で多くの児
童・保護者・職員と
の出会いがあり、印象的な体験をさせていただ
いた。その中で、特に印象に残っているのが、
三校目に勤務した西之表市の小学校である。

この学校は、小規模校で、四学級であった。
二年目に、初めて複式学級担任となり、複式の
授業に悪戦苦闘した。教務係でもあった。表計
算ソフトなど当時は活用できず、教頭先生に指
導をしていただきながら、ほぼ手動で時数の計
算をした記憶がある。

また、この学校は西之表市内の学校と合同で
遠泳大会を開催していた。本番に向けて、五月

から練習に取り組んだ。プールで隊列を組ん
で「エイイコラ」と声を掛けながら泳ぎ、途中
で立ち泳ぎをしながら休憩する練習を繰り返し
た。初めて参加する四年生は不安も大きかった
と思うが、完泳したときの達成感は半端ではな
かった。四回伴泳した私も、充実感を味わった。

さらに、この学校は、山間部に位置し、校区
と海が接していなかった。通勤途中で鹿を見掛
けたことや鹿が車にぶつかってきたことなどが
話題になっていた。因みに鹿と車がぶつかって
も、車のボディは凹むが、鹿は起き上がって去
って行くことがある。昼間校庭を鹿が横切って
いくのを数回目にしたこともある。

この学校での四年間の勤務の後、私の転勤が
決まると、連日送別会を開いてくださった。そ
の席で「種子島を出発するとき、長く見送り
をしたいので、飛行機や高速船は使わないでほ
しい」と請われ、感動した。

種子島に赴任していた四年間は、多忙であっ
た。しかし、研究協力校として国語科の公開を
行い、職員が丸となって取り組むなど同僚性
は高かった。校区と合同開催の運動会など、地
域の方々と密接なつながりもあった。教員とし
ても人としても成長することができ、今の自分
につながっている貴重な経験だったと思う。

「人無信不立

慎規律 厳礼儀」

榕城小(熊)

才川 文秋

今年四月に榕城小
学校に赴任した。最
初の出会い、この
言葉だった。「人、
信(まこと)無くん
ば立たず、規律を慎

み、礼儀を厳とす」。本校では、毎朝、子供た
ちがこの言葉を唱えてから学校生活が始まる。
言葉の意味は、「人は誠実でなければ、役に立
つ人間にはなれない。きまりを守って、礼儀正
しくすることが大事」である。本校初代校長の
前田豊山先生の言葉である。前田豊山先生は、
「種子島聖人」と呼ばれ、学校教育が十分でな
かった明治時代の種子島に、新しく十二の学校
を建てたと言われている。また、種子島の発展
や子供たちの未来のためには、学校で子供たち
が学ぶことが大切だと当時の種子島の人たちに
訴え続けたと言われている。保護者や地域の
方々に、前田先生やこの言葉のことを尋ねると、
ほとんどの方が自慢げに話される。前田豊山先
生は、種子島の学校教育の発展に大きく貢献し
た人物であり、今でも種子島の人々の心に強く
生き続けている。

私は、最近この言葉の「信(まこと)」について、
深く考えることが多くなった。子供や職員との
信頼、家族の信頼、様々な人々との信頼、私た

ちが生きていく上で、お互いを信じ、互いに相手を思いやりながら生活することは、私たちが社会生活を生きていく中で一番大切なことだと考える。時には、裏切られたり、傷付けられたりして落ち込むこともあるが、ほとんどが信(まこと)の心で社会生活は成り立っている。また、その信(まこと)の心を育むためには、規律を慎んだり、礼儀を厳とすることが大切だと思う。つまり、この言葉は、それぞれつながっており、不易とされる学校教育の礎になって、これまでの本校の教育活動を支えてきたと考えられる。本校の子供たちや地域の方々はこの言葉を「榕城魂」と呼び、とても誇りに思っている。人と人との信頼関係は、日々幸せに生活する上で最も大切なことだと学んでいる。これからも、誠実で素直で明るい榕城っ子と共に、この教えを大切に一人一人の子供たちや教職員に寄り添って頑張っていきたい。



読書案内



■佐伯夕利子 著

教えないスキル

〈ビジャレアルに学ぶ7つの人材育成術〉

田崎小(隅) 岩 戸 淳

優れた選手を輩出する海外の育成型クラブチームで指導者を経験された著者の視点から、一貫して日本における教育・社会の抱える根源的な問題に関わる記述と考察がなされている。読み進めるうち、人は、何をしてもどんなことを言ってもそのことが受容される安心安全な環境のみ、成長できると分かる。要は自分が認められているということ、自分の意見や考えを受け入れてもらっていると実感することが大事、正に究極のコーチングである。

話はそれるが、自分が教師になり始めの頃を思い起こした。その頃、教育のキーワードはどこを向いても「新しい学力観」だった。どうやら、自分らの世代が受けた詰め込み式、例えば、円の面積を求める公式は半径×半径×円周率、半径が〇〇のときの円の面積は…、等々が誤りだったらしい。単純に、知識・技術より関心・意欲・態度が大事だと受け止めた。結果は承知のとおり、「ゆとり教育・ゆとり世代」論議で散々叩かれた。それを受けた人たちに何も責任はないのに、である。この過程で私は、「新しい〇〇」には踊らされ過ぎないようにしないと子供が不幸になる、と強く思ったものである。

時を経て、コロナ禍に出てきた「新しい生活様式」なるもの。このとき、「新しい」という言葉は「古い」システムに合わない層にはキラキラと輝いて見える言葉なのだろうと思った。混乱の中で、何をどのようにすればよいかの判断を促す根拠や、共有できる正しい情報を皆が求めていた。この本質を見失わない姿勢が何より大事であることを身をもって知った。ここに至って「新しい〇〇」ではない。「ウェルビーイングの向上」である。それはそうである。自分で考え判断するという能力こそが形成されるべき学習結果であることを、多くの教育関係者が理解はしているからである。

正解を教えるスキルからの脱却に、本書の示唆する内容は限りなく広く、深い。

小学館 八八〇円



■シーナ・アイエンガー 著

選択の科学

小野小(始伊) 高見 憲 次

現在の自分を形作っているものは、これまでの自分が選択してきた結果である。

本書は、その選択という行為について、様々な実験結果を用いて、複数の選択肢から、どのように自身が考え、どのように選択していくのかを、心理学や行動経済学等の観点から考察している。自ら選択したと考えていることも、時には選択させられた結果であるといったことなど、人間の思考について理論的に追究する大変興味深い内容となっている。

「白熱教室」というテレビ番組がある。そのシリーズの一つとして特別講義をしたコロンビア大学のシーナ・アイエンガー教授の著書であ

る。厳格な宗教を信仰する家庭に育ち、十代の頃に視覚を失った著者のアイエンガー教授は、その生い立ちから「選択」を研究テーマにして長年研究を深めていった。

「目が見えないことで選択を制限されることについてどう思うか。」という記者からの問いに、「制約を課されることで、逆に本当に大切なことだけに目を向け、選択しやすくなる。限られた選択肢を最大限活かすために、創造性を発揮することもまた楽しい。」と答えている。

選択肢が多すぎると選べなくなる実験として有名な「ジャムの研究」をはじめ、「今の一〇〇ドルが将来の一二〇ドルか」や「命の選択」等、具体的な事例や実用的なアドバイスが豊富に提供されている。「選択」を通して自分自身の生き方を考えるときにも、教育に携わる者として、子供たちとの関わり方や授業改善を考えるきっかけとしても価値のある良書である。

校長として、日々選択を繰り返している。本書では、「専門知識の効果が組み合わされば、選択肢への対処能力は飛躍的に向上する。」と述べている。学校経営の専門職として、今後も自身を高めていく選択をしていこうと改めて思わされた本であった。

文藝春秋 一六一九円

■オリバー・パークマン 著

高橋璃子 訳

限りある時間の使い方

郡山中(市)内 健 史

校長として取り組むべき課題は何か、と問われれば、その答の一つとして、皆が業務改善を挙げるであろう。赴任して二年半、様々な方策を考え、実行し、超過勤務時間の削減が図られても、教職員の多忙感を訴える声はなくなりません。そんな中で、皆が、限りある時間を有効に使い、業務の効率化を図れるようになるにはどうすればいいかを考え続けていたときに、本書のタイトルが目に入った。いわゆるタイムマネジメントに関する新たな視点やアイデアを得ることを期待して読み始めたのだが、その期待はよい意味で裏切られた。

本書は「長い目で見れば、僕たちはみんな死んでいる」というイントロダクションに始まり、「現実を直視する」「幻想を手放す」という二つのパートからなる。パートはさらに、「なぜ、いつも時間に迫られるのか」「効率化ツールが逆効果になる理由」「本当の敵は自分の中にあ

る」「時間と戦っても勝ち目はない」「忙しさを
の依存を手放す」等の刺激的タイトルが付され
た計十四の章からなり、「僕たちに希望は必要
ない」というエピソードで締めくくられている。

タイトルから受けるイメージに反して、本書
は、筆者と多彩な識者のエピソードや知見を交
えながら、読者にやさしく語り掛けるような口
調で綴られている。読了後は、時間管理に関す
る筆者の深い洞察に触れたことで、現代の社会
の中で生きることや人生の意味を問い直しなが
ら、自身の意識に変化が生まれたことに気付く。

現任校での時間、教職生活、そして、自分の
人生、全てが有限の時間であること。そのこと
に気付かずに、または、目をそらしたまま時を
過ごしがちなこと。人生のあらゆる瞬間はある
意味で最後の瞬間であり、その貴重な瞬間を、
いつか先の時点のための準備として無自覚的に
ぞんざいに扱うことは愚かな行為であること
……。広い視野、深い思索に触れることで、時
間との向き合い方を再考できた一冊であった。

かんき出版 一七〇〇円



■矢口高雄 著

ボクの学校は山と川

福山高 田 口 浩太郎

筆者の矢口高雄は秋田出身の漫画家である。
矢口は高校を卒業後、地元の銀行に十年ほど勤
務していたが、少年時代から手塚治虫に強い憧
れがあり、銀行在職中も漫画家になるという夢
を断ち切れずに創作活動を続けていた。そして、
三十歳の時に上京し、本格デビューを果たした
後、『釣りキチ三平』で一躍漫画家のトップに
躍り出ることとなった。

矢口は、漫画をはじめエッセーなど多数の作
品を残している。大ファンであった私は、矢口
の知識の幅広さや観察力、創造力、そして何と
いってもその圧倒的な画力に魅了され続けてき
た。矢口の作品に触れていると、民俗学に関す
ることについては柳田國男を、環境保護につい
てはレイチェル・カーソンを、動物文学的な側
面については椋鳩十を想起させられることが
度々あった。一部では「漫画界の田園詩人」と
も言われていたそうである。矢口は単なる漫画
家ではなく（私は手塚治虫と並ぶ巨匠だと考え

ている）、自然と人間の関わりを深く見続け、
自然の美しさや尊さを表現した芸術家であり、
作家であり、詩人であったと思う。

さて、本題の「ボクの学校は山と川」であるが、
内容は矢口が小中学生の時代に故郷の自然や学
校で体験したことがテーマとなっている。作品
の中では、自然との関わりをはじめ、当時の生
徒と教師との交流がリアルに描かれ、教育論や
教師論をはじめとした学校教育を考えるのにも
大変参考になる。山や川などの自然、そこでの
生き方を教えてくれる家族や住民、子どもたち
の出会いが感情豊かに描かれており、実際に小
学校や中学校向けの教科書の教材としても扱わ
れていた作品でもある。

描かれている時代は昭和であるが、故郷の自
然の豊かさ、人々の営みの素晴らしさなど、令
和の時代にも多くの示唆を与えてくれる作品で
あり、ぜひお薦めしたい一冊である。

講談社 七一五円



これといって人に語れるほど打ち込んだ趣味やスポーツは正直言ってない。学生時代一番長くやったのは小学校低学年から中学校までの剣道。それも、途中、小学校高学年の二年間は、息継ぎがでぎずに泳げなかったために水泳部に所属し、中断した。高校では、新しいことを求めた。当時人気の映画の影響も受け、ボクシング部にほんの少しの間身を置いた。一つのことを突き詰める経験をしてこなかったことを悔やんだこともあったが、今振り返って肯定的に捉えるならば、新たな世界のあるもこれも、ちょっと知りたい見てみたいという思いを心に宿らせたかもしれない。教師として働き始めてからは、学生時代の経験にはないものに触れていくことになる。

趣味・文芸

新たな地、新たな出会いで楽しみを

茶花小(大) 段原修司

た。何よりも自身のスコアの伸びを求めて臨む緊張感がたまらない喜びであった。私だけでなく二十歳代から五十歳代、当時の校長も含め同僚全員が、遠足を待ち望む子供と似た気持ちで当日を迎えていたに違いない。また、この学校でバレーボールスポーツ少年団の顧問、後に監督をすることになった。苦手だと感じていたバレーは、指導力不足による子供たちへの申し訳ない気持ち先立ち、しばらくはつらいものがあった。しかし、跳ねるボールのように生き生きと練習し、伸びようとする子供たちの懸命な姿に引張られるように、私もできることに努

四校目は在外教育施設勤務で、アメリカンフットボール観戦の楽しさを味わった。関西に住んでいた大学生時代に一度だけ、日大と京大で行われた「甲子園ボウル」を観戦したことがあった。アメリカンフットボール大学日本一を決める選手権の決勝戦である。初めて見る試合で、友達にルールを教えてもらいながら観戦した。日本国内ではアメリカンフットボールがテレビ中継されることはほとんどなく、それ以後は関心が薄れていた。勤務地のアメリカはまさに本場。テレビでもよく見掛けるようになった。攻守がはっきりしているところ、スピード感、守

備の穴をすり抜けるランプレーの爽快さなど、目が離せない面白さがある。何よりも、遠い前方を走るレシーバーのもとに投げるレジーブームのような長く正確なパスに興奮する。クワ

オーターバックの判断力と技能が見どころであった。楯円のボールを投げてみたくなり、当時中学生の息子に相手をしてもらったが、きれいな回転で投げるのは簡単なことではなかった。

大会(ダブルス)を行うことが恒例となつてい、仕事に対する情熱も職員間の交流も活気溢れる学校であった。未熟なりにも仕事に励みつつアフターファイブを楽しむ充実感を味わった。学年部旅行で隣県を訪れるなど、よき先輩方からいろいろ教わったことも忘れられない思い出である。

再配で赴任した学校では、元々関心のあったゴルフとの出会いがあった。一人では始めにくいと思っていたところ、経験ある先輩に声を掛けてもらった。すぐにのめり込んだ。コンペ方式で行う毎回のラウンドは初心者でも楽しめ

めた。三校目では、図らずもそのバレーボールの経験が生きたことになった。職務に真摯に向かうのは当然のこと、バレーボールに対する熱量も中途半端ではなかった。決勝トーナメントを勝ち進み、足がつった先輩がコート内に立っているだけの状況になりながらも九人で戦い、試合を終えたときには涙が出そうになった。団体で競技するスポーツの楽しさを改めて実感した。まさかバレーでこのような感情を味わうとは、初任教時代の私には到底想像できたものではない。

転勤があることで、その土地でできること、出会った人との縁で味わえることがある。転勤族の魅力と言ってもよい。現在は海に囲まれた与論島にいる。これからはイカ釣りのシーズンに入る。釣果なしで帰ることが多いが、潮の香りと波の音、毎回竿を振るときの期待感を楽しんでいるところである。

郷土の紹介



地域みんなが応援団

上場小(北) 山 本 裕 三

一 開拓集落 合い言葉は「開拓心」

上場小学校がある出水市大川内上場地区は、市の中心部から約二十km離れた標高五百m程の高台に位置する開拓集落である。先人たちが不毛の山林原野を切り開き築き上げた豊かな農地を基盤として、酪農、肉用牛の飼育、茶や露地野菜生産などに取り組んできた。寒気が厳しく、夏場は涼しいものの、冬場には氷点下になったり、積雪したりすることがある。

一九九四年には上場集落と開拓集落が合併し、新たな「上場地区」としてスタートを切った。その後、開拓の精神とともに歩んだ先人たちの業績や、むらづくりの推進に関わる活動が県や国に認められ、知事賞や天皇賞を受賞した。二〇〇八年には、地域活性化の拠点の一つとして上場高原コスモス園の敷地内に「秋桜館」も整備された。

二 「上場高原コスモス園」

上場小学校から歩いて十分弱のところ、秋になると二十五万株のコスモスが咲き誇る「上場高原コスモス園」がある。

江戸時代に開拓が入った上場高原は標高五百mの高台にある。ここにコスモスが本格的に植えられたのは一九八三年(昭和五十八年)六月のこと。出水市街地に拠点を置き、市の活性化を提案していたボランティア団体「いずみ兵児の会」の呼び掛けだった。兵児の会は上場高原の休耕地など10aを借り、ボランティアの手でコスモスの苗三万株を植えた。高原に咲くコスモスは、報道などで取り上げられると多くの花見客を呼び寄せた。この反響に励まされる形で植栽面積を徐々に拡大。花の持つ「集客力」に驚いた校区の協力者も増えていった。九十年には、市が高原の市有地5haを提供する形で市営の「上場高原コスモス園」へ発展。花の管理は、地元住民に委ねられた。

現在、九月下旬から十月中旬にかけての花の季節には特産品市やバーベキュー大会も開催され、約十万人が校区を訪れる。一年間で最も賑やかな季節となる。

三 「地域みんなが応援団」

上場自治会会員約六十戸。この会員全戸が上場小学校PTAの会員となっており、極小規模校を支える支援組織となっている。令和四年度には、会員あげて募金活動に取り組み、校旗を新調することができた。また、「カブトムシの館」を地域の有志がボランティアで建ててくださった。本校の特色ある教育活動を進めていく上で地域の協力は欠かせない。地域と合同で開催される運動会では、児童、職員、地域青年団で応援団を結成し運動会を盛り上げていただいた。まさに地域ぐるみで学校を支援している温かい人情味あふれる地域である。



上場高原コスモス園



校旗お披露目式

自分の心に、理想の情熱を 呼び起こす人物を持とう。

早くから理想を描いて
情熱を燃やしたことは
途中で不運に出会っても
最後は救いの力となる。



白谷雲水峡

© K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」
松山 武史 氏



一般財団法人校長会館だより

校長会館主催の教育講演会につきまして
十二月十日(日)に無事終了いたしました。
開催にあたって多くの方々にご協力いただき
ました。感謝申し上げます。次年度もよろしく
お願いいたします。

教育長異動

○再任 令和五年十一月二十六日付

いちき串木野市 相良 一洋 氏

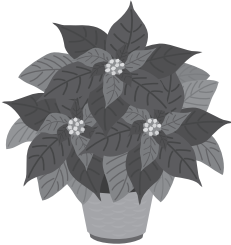
○再任 令和五年十二月十九日付

三島村 室之園 晃徳 氏

季節の言葉「師走」 しわす

梅さげた 我に師走の 人通り

与謝蕪村



編集後記



月日の流れは早いもので、令和五年も残り
一か月となりました。今年も、教育に関する
様々な問題が取り上げられ、報道されました。
いじめや不登校児童生徒の増加、学力低下や
教育格差、教職員の不祥事、先生のなり手が
少ない、先生の離職率が高まっているなど、
子供たちの問題とともに、教員不足に関する
残念な報道が、連日繰り返されています。

教員不足に対し、国は教員の正規採用者数
の増加や部活動指導の負担軽減、ICTの利
活用といった、学校の働き方改革を推進して
います。教員不足の解消に向けて、教員をよ
り魅力的な仕事にするための教育制度の在り
方の大胆な見直しや条件整備が現在進みつつ
あり、今はまさに大きな転換期にあると言え
るかもしれません。

教師は、学校教育の要であり、子供たちに
寄り添いながら、その成長を実感することの
できる、他では得がたい経験のできる魅力的
な職業です。先生方から寄せられた原稿を読
ませていただきますと、教師だからこそ味わ
える仕事へのやりがいや喜び、子供たちと共
に過ごす時間の大切さ、教師になってよかつ
たという思いが伝わってきます。先生方がこ
れまで経験されたこと、教師の魅力が、これ
から教師を目指す若者にもっと伝えることが
できれば、きっと教員不足という問題は解決
されるのではないかと思います。

最後になりましたが、校務ご多用の中、玉
稿をお寄せいただきました先生方に感謝申し
上げます。令和六年が、全ての先生方にとり
まして、よりよい年となりますように。

今井 誠 (天保山中学校)